



前田透と夢の島チモール

井辻朱美

前田透

新
歌人群像

前田透とらるという歌人をとらえるには、三つのライフステージに伴う三つのファクターがあるように思われる。一つ目は著名な歌人前田夕暮ゆうくれの子であり、一時期自由律をとることもあったモダンな歌誌「詩歌」(白日社)が環境として存在し、幼少期からのびのびとした作歌の機会に恵まれたこと、そして二つ目は戦時中若き主計中尉として赴いたインドネシアのチモール島で、ポルトガルの植民地支配に抗して、ジュキン大王や島の青少年らとともに島に新たな独立王国を打ちたてようとした日々、最後の三つ目は病を得たのを契機に夫人の勧めもあつてカトリックに入信したことである。

それぞれの段階の作品が、前田透の三角形の三辺ともいべき特徴を形作っている。

陸上選手であった大学時代

透は大正三(一九一四)年、夕暮の長男として生まれ、七歳から作歌を始め中学生時代に「詩歌」に作品を発表しはじめる。高校時代から陸上競技を始め、東京帝国大学経済学部に入学する。このころの作品は自由律であり、昭和十年代の作品とは思えない闊達かつたな息吹にあふれている。

山、大きく黙つて暮れて行く——旋回
滑降してくだり出す

草原にひとこえホルンひびかせて、雲
はかがやかに去る——

こうした山歩きの歌と並んで、陸上競技を
主題にした若々しい気負いの歌もある。

しづかにハードルの列ひしめき、はる
かなゴールから審笛が来る

つひに今、自分のリズム。第三ハード
ルへからだを投げる

青年は陸軍計理学校をへて入隊、台湾、フ
イリピン、そしてチモールへと移動してゆく。

船団無表情に敵弾炸裂のなかを行く、
昼近く雲重八分 以上「初期歌篇」より

生涯の夢の源流チモール

自由律ののびやかさは変わらぬまま歌の主
題には、ひきつづいて夢の島チモールがあら
われる。「ポルトガル領チモール中部山岳地
帯のサン・ドミンゴス大王領の主邑オッスに
駐留。大王ジュキンとその一族、混血少年ジ
ュオン等と交流。南海の涯に理想的小社会の

建設を夢みる」と「年譜」（『詩歌』一九八四
年六月号、前田透追悼号）にある。チモール
は透青年にとつての身体を賭した革命の地で
あったとともに、楽園を思わせる南の島でも
あり、そこで彼は「ゴーギャンの『ノア・ノ
ア』の世界を追っていた」（『前田透全歌集』
年譜）かのである。

この島での日々は「チモール詩集」や小説
仕立ての『チモール記』ともなり、また戦後
にチモールを訪れてゆかりの人々に再会して
の歌を含め、生涯を通じて憧憬の中に歌われ
つづける。

王の子の面やさしきを愛せしかばコーヒ
ー樹林を行きてあひにけり『漂流の季節』

ジュオンよ汝がひとみにうつりゐる月
食の月は河氷の上

はげしく生きて若かりし吾が一時期を
記憶しありやジュオン・オリヴェイラ
環礁の彼方ジュオンは娶りアドレスな
き手紙は雪のごとくにつもる『煙樹』

チモール山地の風が吹くのだ日のおお
さだ、私がかいに来たのは君だ『銅の天
わが来し日12人目の子をなせるフェル
ナンド子をトールと名付く』

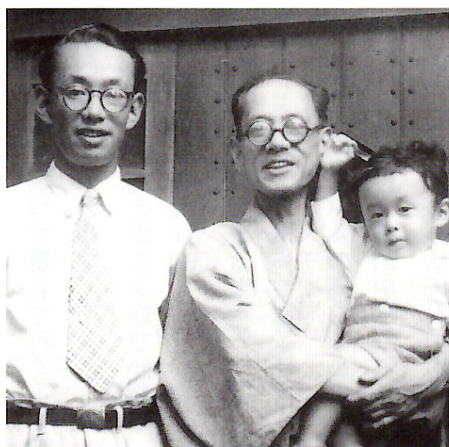


学生時代の登山のスナップ。二十三〜二十四歳ころ。

タマリンドの木のもつ影に身をいれてし
ばし憩いね
チモールの人
風鳴れるチーク疎林を離れ行きて夕日
の時を
生きてあれジュオン
『冬すでに過ぐ』

南の島チモールは前田透の生涯を通じての
いわば夢の故郷であったのだろう。最後の歌
集『天の金雀枝』のさらに後にも幾度となく、
帰るべき地としてチモールは歌われつづける。

カトリックへの入信



左より透、夕暮、宏の親子三代、昭和24（1949）年。

結社「詩歌」は戦時中に定型に復帰し、チモール島にあった透は歌のよりどころを失うが、昭和二十二（一九四七）年復刊した「詩歌」には定型による作歌で復帰することになり、昭和二十六年の夕暮没後は主宰として「詩歌」を継承する。かたわら「新歌人集団」などに参加して熱心に創作を続け、昭和二十八年に第一歌集『漂流の季節』を上梓。四年後には「詩歌」を休刊しつつも第二歌集『断章』を出版、近藤芳美、中井英夫、森岡貞香らとともに書肆ユリイカより同人誌「律」を創刊するなど、旺盛に作品の場を広げてゆく。

昭和四十二年には「詩歌」を復刊、翌年には『煙樹』を上梓と、歌壇の中心的存在となつてゆくとともに、その仕事で中国にたびたび仕事で赴いた商社を退社、昭和四十九年には成蹊大学文学部教授となり、若い学生たちにも短歌における薫陶を与える。

昭和四十二年には「詩歌」を復刊、翌年には『煙樹』を上梓と、歌壇の中心的存在となつてゆくとともに、その仕事で中国にたびたび仕事で赴いた商社を退社、昭和四十九年には成蹊大学文学部教授となり、若い学生たちにも短歌における薫陶を与える。

焼あとの運河のほとり歩むときいくばくの理想われを虐む
『漂流の季節』

さまざまに苦しみながら流れ行く生き方はおそろしく具体的にして
『断章』

ゴーガンがふたたびタヒチへ去りしことその必然は吾にあらずも
『断章』

受洗する子のため白き服を縫う妻の世界よ脆く崩るな
『断章』

旗みな赤く寒風の街を流れ行くはてしなき叫びはてしなき敵
『煙樹』

力強いリズムと屈託することのない思いの奔流。だが、その中にすでにキリスト教への傾きが見えはじめるのは、信者である夫人の存在と子の病のゆえであろうか。聖書の世界への親昵はしづかなまなざしとして始まり、やがてみずからの病とともに、身体化されてゆく。昭和五十二年胃ガンのため手術を受け、同年カトリック荻窪教会で受洗。翌年の再手

術などを経て病は完治、テレビ大学講座（テレビ朝日）出演など精力的に活動を再開、五十五年には第五歌集『冬すでに過ぐ』（第十五回空賞受賞）を出版し、新たな人生のステージの始まりをやわらかく充溢した歌い口で告げる。翌々年の『天の金雀枝』と並んで、この時期の作品がもつとも生命の充溢をみながら、また青年のころの潑刺をよみがえらせるとともに、自在な口語をも駆使して、独自の境地を展開した。

術などを経て病は完治、テレビ大学講座（テレビ朝日）出演など精力的に活動を再開、五十五年には第五歌集『冬すでに過ぐ』（第十五回空賞受賞）を出版し、新たな人生のステージの始まりをやわらかく充溢した歌い口で告げる。翌々年の『天の金雀枝』と並んで、この時期の作品がもつとも生命の充溢をみながら、また青年のころの潑刺をよみがえらせるとともに、自在な口語をも駆使して、独自の境地を展開した。

熱き蠟わが手に散りて火を継げばこの世の生も
『冬すでに過ぐ』

たいせつにせん
わが愛するものに語らん檜の木に日が当り視よ、
『冬すでに過ぐ』

冬すでに過ぐ
面輝くらザロは一步進みいで死より還
『冬すでに過ぐ』

されぬ
われも然かあれ
『冬すでに過ぐ』

やはりチモールなのだあの音は風に鳴りている
『冬すでに過ぐ』

丘のタマリンド
『冬すでに過ぐ』

どうやら董の匂いがして夜の彼方 諸聖人の連禱が始まる
『天の金雀枝』



著者生前唯一の歌碑、昭和50（1975）年7月、徳島県池田町蓮華寺にて除幕式。

ナルシシズムの源泉に立ちて片手挙げ
走り出す助走の少女競技者

金雀枝のパン一塊を地に置いてこの世
のことを嘆かんとする

しかし昭和五十九（一九八四）年一月十三日、輪禍により突然の帰天。遺言により、「詩歌」は終刊となり、白日社は長い歴史を閉じる。

そのこともあろうか、前田透の歌には晩年も老成、時熟といった言葉が似合わないように思われる。「天の金雀枝」以降の歌は、若き将校としてのチモール島時代がよみがえったかのごとく、また大学の教官として日々々々

生に接するなかで、彼らにみずからの学生時代を重ねあわせるごとく、若々しい息吹にあふれている。ふたたび怒濤のようにチモールへの思いが歌われるとともに、音楽の曲名、アジアのさまざまな地名、植物名、新しい商品名などカタカナの多さは驚くほどである。「ティンパニの連打とどろく深き空カリブ海を飛ぶひとつへリコプター」「風ふける山たか空に壁なせりわがレーベンのたゆたいし日を」「四五メートルバラボラ・アンテナの構成は冬空に白き塑像をなせり」など、「詩歌」終刊まで十年あまりを師事、在籍した筆者にとつては、前田透は永遠に若き歌人でありつづけたのだと思えてならない。

今でも思い出されるエピソードの一つある。ほんとうに前田透は颯風が好きだった。天候が荒れてくると、吹きつもの雨風に身の内なるエネルギーをあおられるごとく、杉並区の自宅から大磯まで波浪を見に行ってしまうのだった。そんな稚気とスピードと軽やかさ。それはいつまでも、陸上競技で鍛えた若者のものだった。

わかものよ少し隙間に入れてくれ、夜
が来る（ビューティフル、雨が降る）

『天の金雀枝』以降

歌集としては『漂流の季節』『断章』『煙樹』

『銅の天』『冬すでに過ぐ』『天の金雀枝』『前田透全歌集』があるが、その他に歌論や国文学の学究としての仕事も多い。主な研究対象であったのは落合直文であり、『鑑賞 直文 槐園 躬治』（短歌新聞社、昭和五十二年）などがある。また当然ながら、父である前田夕暮の作品の編纂の仕事が少なくない。『前田夕暮遺歌集』（長谷川書房、昭和二十六年）、『定本 前田夕暮短歌作品集』（短歌新聞社、昭和三十八年）『前田夕暮全集』（角川書店、昭和四十七八年）そして『評伝 前田夕暮』（桜楓社、昭和五十四年）などが大きな仕事であろう。

歌会始の選者を何度かつとめる他、多くの賞の選考委員、また各地での講演を通し、歌壇の重鎮として大きな足跡を遺した。

〈主要参考文献〉

- 『前田透全歌集』角川書店（一九八四年）
- 『チモール記』前田透 蒼土舎（一九八二年）
- 『短歌と表現』前田透 不識書院（一九八〇年）
- 『タマリンドの丘』前田透十年祭記念特別号「かばん」別冊 発行責任者 前田雪子・江草義勝（一九九五年）

（井辻朱美「かばん」発行人）